

教会員ひとりびとりは、神のお与え下さる賜物を使わなければなりません。

この結果、教会は二重の成長、つまり教会員の数の増加と個人の霊の賜物の増加とを経験していくのです。前に述べたように、愛はこの成長への召しの一部なのです。というのは、教会はこれらの賜物を愛のうちに用いるときにのみ、啓発と成長を達成することができるからです。

### 霊の賜物の意義

たまもの

通常の働き 聖書は、牧師が教会の働きをする一方で、一般信徒は教会の席を温め、養われるのを待っているだけといった考えを支持してはけません。牧師も信徒も共に「神につける民」(Iペテロ二・九)として教会を構成するのです。両者は教会の安寧と繁栄に対して責任があります。彼らは、キリストが下さる特別な賜物に従って共に働くよう召されているのです。種々の賜物は、種々の働き、奉仕となって現れ、神の国を広めるために、またこの世の人々を救い主に引き合わせるために、すべては証しあかしによって一つに結び合わされるのです(マタイ二八・一八―二〇、黙示一四・六―一二)。

牧師の役割 霊の賜物の教理は、信徒訓練の責任が、牧師の肩にかかっていることを教えています。神は、ご自分の民を伝道の働きに備えさせるために、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師を任命されたのです。「牧師は教会に属する仕事をすべきではない。そうすることが牧師たちを疲れさせ、他の人々がその責任を果すのを妨げるからである。牧師は教会員に、教会や地域においてどのよう<sup>五</sup>に働いたらよいかを教えるべきである。」

訓練の賜物をもっていない牧師は、牧会に立つべきではありません。そういう人は他の分野で神の働きをなす

べきです。六 教会に対する神のご計画が成功するかどうかは、神のお与えになった賜物を信徒が使っていくよう訓練をする牧師の才能にかかっているのです。

**賜物と伝道** たまもの 神は霊の賜物を、からだ全体に益となるように与えられるのであり、単にそれを受ける個人に益となるためではありません。賜物が個人のためだけのものでないと同様に、教会は自分たちのためだけに賜物すべてを受けけるではありません。神は教会の中にいろいろな賜物を与えられましたが、それは、神が計画された世界伝道を完成するためのものです。

霊の賜物は、良い働きをしたことに対する報酬ではありません。それは、良い働きをするための道具の役割を果たすものです。聖霊は、通常はその人が生れ持った才能に合っている賜物を与えられます。もちろん、生れ持った才能そのもののみが霊の賜物ではありません。聖霊によって人が力づけられるためには、新しい生命が必要です。わたしたちは、霊の賜物を受けるために、ぜひとも新しく生れなければならぬのです。

均一化でなく多様性における一致 他の信徒たちを自分と同じようなクリスチャンにしようとする人がいます。しかし、これは人間の計画であって神のご計画ではありません。霊の賜物が多種多様であるにもかかわらず、教会は一致を保っているということが、互いに補い合うという賜物の性質を表しています。つまり、神の教会の成長は、ひとりびとりの信徒にかかっているということです。教会には、かつて教会が歴史の中で据えてきた基盤の上にさらに築き上げていくべき働きがあります。そして、神は教会の中のすべての賜物、務め、そして働きがここで融合させられることを意図しておられるのです。隅のかしら石であるイエス・キリストにあって、

「建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長」(エペソ二・二一) するのです。

証し—賜物の目的 信徒には様々な賜物が与えられています。これはそれぞれに個別の働きがある、ということです。しかしながらどの信徒も、自分の信仰の証しができなければなりません。信仰を分かち合い、自分の人生の中で神が何をなして下さったかを他の人々に話すのです。たとえそれがどんな賜物であれ、神がそれぞれに賜物を下さっている目的は、それを受ける人がこの証しができるためであるからです。

霊の賜物のまちがった用い方 霊の賜物を用いることを拒む信徒は、自分に与えられた賜物が衰えていくばかりでなく、永遠の生命をも危険にさらしているということがわかってくるでしょう。愛のまなざしで、イエスはおごそかに、自分の賜物を用いない僕は、永遠の報酬を失った「悪い怠惰な僕」(マタイ二五・二六—三〇)<sup>七</sup>にほかならないと勧告されました。不忠実な僕は、自分のまちがいが慎重に考えた結果であることを、全的に認めています。従って、自分のまちがいに対して責任を負わなければなりません。「成り行きにまかせ、機会を避け、責任をのがれようとする者は、審判の大いなる日に、偉大なる審判者によって、悪人たちと共に分けられるのである。」<sup>八</sup>

### 霊の賜物の発見

教会員は、教会の伝道活動に加わって成果を収めるために、自分たちの賜物を知らねばなりません。賜物は、それを持つ者を奉仕と豊かな生活からくる喜び(ヨハネ一〇・一〇)へと向かわせる羅針盤のような働きをしま

す。もし、わたしたちが、「賜物を認め、開発し、使おうとしないなら（あるいは単純に、否定するなら）、教会はあるべき姿以下でしかないでしょう。神がご計画されたもの以下でしかないでしょう。」<sup>九</sup> わたしたちが霊の賜物を発見する過程は次のとおりです。<sup>一〇</sup>

**霊的備え** 使徒たちは、罪人をキリストに導くために、ふさわしいことばを語るようにと熱心に祈りました。彼らは、お互いの中にあつた相違や、優越感を捨て去りました。罪の告白と悔改めが、キリストとの非常に親しい交わりをもたらしました。今日、キリストを受け入れる者は、聖霊のバプテスマを受けるために同様の経験が必要です。

聖霊のバプテスマは、一回限りのことではありません。毎日体験できるのです。<sup>一一</sup> わたしたちは、神にこのバプテスマを嘆願する必要があります。なぜなら、これは教会に証<sup>あか</sup>しする力と、福音を高らかに語る力とを与えるからです。このようにしてわたしたちは、絶えず神に生涯を委ねていかねばなりません。そして、キリストと充分に交わり、賜物を発見する知恵を神に求めねばならないのです（ヤコブ一・五）。

**みことばの学び** 新約聖書が霊の賜物について教えていることを祈りをもって学ぶことによって、聖霊がわたしたちのために用意しておられる特別な働きを、聖霊自ら心に印象づけて下さるのです。わたしたちは、神の働きをするために少なくともひとつは賜物が与えられていると信じることは大切です。

**神の導きへの委ね** わたしたちが聖霊を使うのではなく、聖霊がわたしたちを用いられるのです。それは、神の

民の中に、「神のよしとされる願いを起させ、かつ実現に至らせる」(ピリピ二・一三、RSV)のは神だからです。神の備えられたどのような奉仕でも、それをさせて頂けるのは特権なのです。わたしたちは、神が他の人々をとおし、わたしたちの助けを求めて、働いて下さるよう、お委ねすべきです。ですから、わたしたちは、どんなときでも教会の必要に応えることができるように、準備をしておかねばなりません。わたしたちは、新しいことをしようとするとき、恐れてはならないし、才能や経験が不足しているとき、いつでもこれらについて援助を求めする必要があります。

キリストのからだからの確認 神は、これらの賜物を神の教会をうちたてるために与えられるので、わたしたちは自分の気持ちからでなく、キリストのからだ(教会)の判断によって、自分に賜物が与えられているということを再確認できるのです。他の人の賜物より、自分の賜物を認める方がしばしば難しいものです。自分の賜物に関して、他の人の言うことに喜んで耳を傾けるばかりでなく、わたしたちは神の賜物を他の人の中に認め、確認することも大切です。

神がわたしたちに命じられた地位または働き、あるいは奉仕というものに、わたしたちがあずかっているということを知ることは、何と感激であり、心満たされることでしょう。聖霊をとおしてキリストが下さる特別な賜物を、神の働きのためにわたしたちが用いることができるということは何という祝福でしょうか。キリストは、恵みの賜物を分け与えたいと望んでおられます。今日でも、わたしたちは神の招きを受け入れることができ、そして、霊に満たされた生活の中で、神の種々の賜物がいったい何を成しうるかを発見することができるのです。